

令和5年度 園評価書

園番号 17

園名

静岡市立久能こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かに たくましく	わくわくがいっぱい	自分の好きな遊びを見つけて試したり工夫したりして夢中になって楽しんでいる	子どもの姿や興味、つぶやきなどを捉えた素材や教材の準備を行い、自ら見つけて試せるような置き場所の工夫をした。また、保育者が一緒に遊び込み楽しさを共有していくことで、夢中になって楽しむ姿につなげることができた。	A	A	・環境を充実させているのが良いと思う	・発達年齢にあった用具や教材が準備できているが、環境の配置は子どもの使いやすい所にあるか等今後も職員全体で話し合い共有していく ・身近な人との関わりを楽しめるようになってきているので、様々な人との触れ合いを大切に、地域や自分の周りには、いろいろな人がいることに気付く、相手を思いやる気持ちがもてるようにしていく ・子どもの『やってみよう！』思いを汲み取り、繰り返し楽しむ中で『できた！』という成功体験を重ねていけるように声かけや援助を行っていく
		自分の思いを表現したり相手の思いに触れたりする中で、身近な人との関わりを楽しんでいる	運動会での楽しかった経験や発表会での魔法ごっこをきっかけに、園児同士の言葉のやりとりが増え楽しんでいる姿がみられた。S型デイサービスとの月2回の交流を繰り返す中で、自身の思いを受け止めて関わってもらうことの心地よさを感じ、身近な人と関わる楽しさを増やすきっかけになった	A	A		
		体を思いきり動かすことを喜び楽しんだり挑戦したりする姿がある	運動会で体を動かす楽しさを体験してから、固定遊具やゲーム性のある運動遊びを積極的に楽しむようになった。保育者が褒めることで、うんていに挑戦して「〇秒できた！」と喜び、さらに挑戦しようとする姿がある	A	A		

II 各領域に関わること

大項目		評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)	
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達や経験の差に考慮し、一人一人に応じた柔軟で応答的な援助が行われている	会議や日々の話し合いの中で個々の発達や経験させたいことなどを話し合い、それぞれに合わせた柔軟で応答的な援助を行うことができた。運動会や発表会でも子どもが無理なく参加できるものを細かく話し合っ子どもに合わせた行っていた	A	A	・園児が『自分の命は自分で守る』意識をもつことは難しいことである。園児に要求しなくても職員が抱えて避難すればよい。災害は怖いという意識がもてれば良い。リバーティ橋の川の工事が決まり土砂を支える堰堤を2重にすることに	引き続き子どもの発達や手立て、援助や方向性などについて職員全体で話し合いをもつ。来年度は1家庭となるので少人数ならではの保育に加えて現状課題についての話し合いを密に行い、家庭保育との差別化を図っていく 安心安定した気持ちで園生活を送れるように、子どもの様子に合わせた声かけやスキンシップ等を継続していく。職員間でも声のトーンや表情、仕草など定期的に確認し合っていく 様々な場所へ散歩に出かける機会を増やしたり、梅干し先生など地域の方に『先生』になってもう取り組みなどをしたりして、地域の自然や人との触れ合いを増やしていきたい	
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人が安心、安定した気持ちで園生活を送れるよう、スキンシップや声かけ等の関わりに努めている	職員全体で子どもたちを見守り声かけをし、子どもの思いを受け止めるようにした。受け入れ時は担任がスキンシップを図ったり、不安時には寄り添い声かけをしたりして、安心安定につながるようにした。不適切保育について考える研修やアンケート等も活用し常に意識するようになった	A	A			
	(3)環境を通して行う教育及び保育	地域の自然や人との触れ合い、久能山東照宮の文化等、久能ならではの経験を大切に、おそびや生活に取り入れている	園内や近隣の自然に触れ、遊びに取り入れるようにしたり、畑の作物のお届けや、月2回のS型デイサービスとの交流等地域の自然や人との触れ合いを大切に。5月の梅摘みから出来た梅干しの奉納をしたり、境内の案内や説明を通して、久能山東照宮の文化に触れることができた	A	A			
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な想定を繰り返し行って行く中で、子ども達に『自分の命は自分で守る』意識が育つよう指導している	月2回の様々な想定での訓練の中で、保育者の話を聞き素早く行動することができるようになった。自らの身を守るために必要な防災具の装着はまだ自分でできていない現状がある。指示によく従う姿はあるが『自分の命は自分で守る』意識までには至っていない。	B	A	・園児が『自分の命は自分で守る』意識をもつことは難しいことである。園児に要求しなくても職員が抱えて避難すればよい。災害は怖いという意識がもてれば良い。リバーティ橋の川の工事が決まり土砂を支える堰堤を2重にすることに	土砂災害時のマニュアル作りや2階からスロープを通って避難する場合の確認等例年通りではない訓練を行うことができた。今後は1回1回の訓練で『自分の命は自分で守る』ことを繰り返し伝え意識できるようにしたい	
3 健康管理・指導	(1)健康教育の充実	基本的な生活習慣の自立に向け、個々に合わせた援助を行っている 栽培からクッキングの体験を通して食への関心が高まる取り組みをしている	手洗い、うがい、気温に応じた着脱、物の扱い方など個別に声かけやイラスト指示などの援助を継続して行っている。栽培やクッキングを通して食への関心が高まっており、園での経験を通して、家庭でも野菜を食べてみようとする姿がみられた	A	A			園児たちが、自身でメニューを考えて作ることも楽しみの1つになったので、職員は事前に栽培方法やどのようなクッキングができるかも調べ、共有し、子どもへの食への関心を高められるように園全体で取り組んでいくようにする
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	話し合いの機会を密に持ち、個々の特性や成長する姿を共有し、全職員で個別支援計画に基づいた関わりを行っている	サポートプランの共通理解だけでなく、日々の保育の中での気付きも話し合ったり共有するようになった。行事でも支援児の特性に合わせて対応することで無理なく参加することができた。3学期からは就学を意識した取り組みを行っている	A	A			来年度は支援児の在籍はないが、園児皆がわかりやすい援助方法を職員全体で考えたり実践したりしていくようにする。支援児が不在でも園内研などを利用し、知識を高めていくようにしたい
5 組織運営	(1)組織体制の充実	分掌担当がリーダーシップを発揮し、互いが協力し合っ、円滑な園運営につなげている	職員数が少なく一人一人が受け持つ分掌が多いので、打ち合わせ時の話し合いや学期ごとの振り返りを行うことで、担当以外の分掌の内容の共有を図り、担当を中心に職員同士が協力し合っすすめしていく事ができた	A	A	引き続き、お互いの分掌の役割をしっかりと共通理解し、職員全体で取り組んでいくようにする。久能山東照宮の梅を通じた活動の担当を独立させることで、円滑な実施につなげていく		
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマ『やってみよう！』につながる環境作りに向けて環境図、日誌を活用し、遊び出しの環境を工夫し、定期的に評価を行っている	日々の保育、公開保育、月案検討などを通して園全体で子どもの理解が深まるように話し合ったり遊びのつながりがわかるように日誌の記入を行ったりしてきた。11月の園内研修には外部講師を招いて保育を参観してもらったことで客観的な意見をいただき、話し合いの中で課題にも気付くことができた	B	A	・課題があることを受けて、外部講師を招いたり意見をきくなどの向上心がある	日誌で遊びのつながりがわかるような記入の仕方を職員全体で考えたり、定期的な週案検討を行ったりしていく。来年度も園内研修があつた、少ない園児への声かけの頻度やタイミングについての意識を大切にしている	
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	季節の遊びや興味を持った遊びを十分に楽しむための素材や道具の提供、教材研究が行われている	年間を通して自然との関わりを大切にできた。秋にはヤツデの葉やさつまいものツルでおぼろの家作りなどを楽しみ、寒い日には霜柱の遊びができるように土山に水をかけて下準備をしておくなどして、季節の遊びが楽しめるようになった。素材や教材の使い方を、担任間で話し合いはあったものの全職員の共通認識までには至らなかった	B	A	・人数が少ないので大変さがあるが、細かい所までよく考え、子ども主体で成長を促し喜んでく出し合ったり実際に試したりして共通認識、遊び方の共有をしていきたい	長期休業中の教材研究に重点を行うのではなく、日々の話し合いの中で、ちょっとした素材や教材の使い方など、意見を出し合ったり実際に試したりして共通認識、遊び方の共有をしていきたい	
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	写真を取り入れたボードと引き渡し時の伝達で日々の遊びの姿や成長を伝えたり、保護者の思いに寄り添って喜びや悩みを共有しあっている	写真を取り入れたボード、毎月のクラス便り、送迎時の伝達等日々の子どもの様子を保護者にわかりやすく伝えコミュニケーションを図った。12月に個別に面談を行ったことで、送迎時には話しにくいようなこともじっくりと聞き、共有することができた	A	A	来年度は1家庭になり、コドモの導入もあるため、子どもの姿の発信の仕方については、検討をしていく。参加会を設定したり必要に応じて面談をしたりして家庭との連携を深めていく	来年度も大谷こども園と交流を行い、集団ならではの経験を重ねていきたい。年長児、1年生が無いこととなるが、年上児童への憧れの気持ちももてるよう、久能小学校児童との交流を絶やさないようにしていく	
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	久能小、大谷、八幡こども園等との交流機会を多く持ち、子ども達が集団の経験をしたり職員同士が交流を深めている	大谷こども園と月1～2回交流する中で、様々な遊びの刺激を受けたり、好きな友だちができた。自園ではできない経験ができた。小学校との交流では年上の児童から優しくされる経験を、親しみをもつことができた。職員間でも研修や公開保育等交流をもつことができた	A	A	園だよりだけでなく収穫した作物を、近所の方へお届けしたりS型デイサービスの方々との関わりが楽しくなっている様子がみられているので、今後も近隣の園との関わりや月2回のデイサービスの連携を図りながら密な関係を築いていきたい		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	『久能のみなさんこんにちは』(園だより)のお届けやなかよし農園での活動、東照宮での梅摘み等、継続的な交流が実施されている	なかよし農園で栽培し収穫した野菜や梅干しなどを近所の方に届けたり、奉納したりする中で、子どもたちもお届けが楽しみに変わり、自分から積極的に声かけをし、自分がやっていることを自分から伝えて、継続的な交流をもつことができた	A	A	・地域の方も密なやりとりを行い、最大限に生かす方法を考えている		